

立位補助器を用いた移乗介助の心身負担に関する研究

著者	岩倉 浩司
発行年	2020-03-10
学位授与機関	滋賀医科大学
学位授与年度	令和元年度
学位授与番号	第243号
URL	http://hdl.handle.net/10422/00012707

氏 名 岩倉 浩司

学 位 の 種 類 修士（看護学）

学 位 記 番 号 修士第243号

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第3条第1項

学 位 授 与 年 月 日 令和2年 3月10日

学 位 論 文 題 目 立位補助器を用いた移乗介助の心身負担に関する研究

審 査 委 員 主査 教授 遠藤 善裕

副査 教授 宮松 直美

副査 教授 喜多 伸幸

論文内容要旨

※整理番号	248	(ふりがな) 氏 名	(いわくら ひろし) 岩倉 浩司
修士論文題目	立位補助機を用いた移乗介助における心身負担に関する研究		
<p>【目的】 立位補助機を用いた移乗介助における介助者および被介助者の心身負担軽減効果を明らかにすることを目的として実験を行った。</p> <p>【方法】 被験者は18～30歳までの介助者役 (Care giver:CG) と被介助者役 (Care receiver:CR) の15組30名とした。CGとCRのペアは同性とし、体重の軽い方をCRとした。実験課題は、徒手および立位補助機使用によるベッドから車いすへの移乗介助（前者を「徒手」、後者を「機器」）とし、その順で交互に休憩を挟んで各々3回行わせた。実験本題前に、医師による問診、説明と同意取得を行い、移乗介助を十分練習させてから、基準姿勢時の実効筋電位（以下、RVC）測定のための姿勢をとらせた。各課題終了直後にCGとCRの負担感を修正ボルグスケールにて回答させた。CGとCRの心拍数及びCGの左右の肩と腰部の表面実効筋電図を測定した。表面筋電図は、解析時間中の実効筋電位の95%ile値をRVCで除し%RVCを算出した。【機器】での負担感、心拍数中央値、4カ所の%RVCを【徒手】でのそれらと統計学的に比較した。</p> <p>【結果】 課題遂行が適切であった13組を解析した。負担感について、CGで小さい10人、同じ3人で有意差あり、CRで小さい4人、同じ5人、大きい4人で有意差なし。心拍数について、CGで小さい1人、大きい12人で有意差あり、CRで小さい10人、大きい3人で有意差なし。筋電位については、測定ミスがあり12人で解析した。各部位の3セッションの平均値は、【機器】の値が【徒手】よりも低かった。【機器】と【徒手】との間に、右の肩と腰で有意差を認めた（二元配置分散分析）。</p> <p>【考察】 【機器】では、すべての部位で【機器】が【徒手】と比較して筋出力が低かった。特に、右の肩および腰において、有意な筋負担の軽減効果が認められた。【徒手】では、CGが主として右上肢を使ってCRを抱え上げたことにより、右の肩の負担が大きくなったと考えられた。立位補助機がCRの抱え上げを行いCRの体重がCGにかからず、【徒手】の荷重負担がほとんど消失し、CGの負担感および肩と腰の筋負担が軽減した。立位補助機使用は、上肢や腰部の筋骨格系障害の予防に有用であると考えられた。また、【機器】でのCRの不安・不快感の理由は、下肢老人体験キットと機器のスネあてとの不適合など機器の構造に起因する問題であった。CRの心拍数から【機器】で比較的安楽に介助を受けることができたと考えられた。</p> <p>【総括】 徒手介助と比べて立位補助機を用いた移乗介助では、介助者の肩と腰部の筋負担の軽減効果が認められ、被介助者にとっても安全・安心の移乗方法であることが示された。</p>			

- 考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。（1,200字程度）
2. ※印の欄には記入しないこと。